

プロクロス『神学綱要』の活動還帰と実体還帰⁽¹⁾

堀江 聡

序

全二一命題の幾何学的証明形式 (more geometrico) を呈し、新プラトン主義哲学の一大体系を提示してみせたプロクロスの『神学綱要』は、分量的にも行論の緻密さからいっても、類書を寄せつけない金字塔というも過言ではない。新プラトン主義とは、そもいかなるものかと問わば、『神学綱要』を繙くことを奨めればよい。そこには、新プラトン主義の公理が整然たる秩序のもと集大成されているからである。

プラトニズムの一応の転回点をプロティノスに置くとすれば、二五三年から二七〇年の間に主としてローマで文字に定着されたその五四篇の論攷から発芽した思想が二世紀に亘り熟成したのち、アカデメイア晩期の学頭プロクロスにおいて經典結集相成ったとすべきなのか。新プラトン主義の徒にとって『神学綱要』が『エンネアデス』に対してもつ意義の相違は、動物学者にとって解剖学が、現に生き呼吸している動物の生態学に対してもつ意義の相違に等しいとの、ドッズの余りにも有名な評言は、プ

ロティノス主義のプロクロスにおけるスコラ化を称賛するといふよりも、頽落の印象を衆人に与えて来はしなかったか。そして同じくドッズの詩藻豊かな比喩に恃んで、ホメロス描くオリュンポスの神々は、かつて極めて生き生きと擬人的に構想されていたにも拘らず、末路はあたかも博物館の埃まみれの棚ざらしのごとく、プロクロスの形而上学的抽象物の体系のなかで、その生涯を終えるというのが正鵠を射たものなのか⁽²⁾。

哲学思想、宗教思想を問わず、時が経つにつれスコラ化は避けられない。それは、思想の明晰化であるとともに形骸化になりかねず、省略による単純化と附加による複雑化の双方向への同時進行であり、原点の改善ないし改悪を来すと断ずるのが難しいとしても変容改鑄の過程である。これらは、意識的になされる場合も無意識裡に進む場合もある。権威的テキストが発生すると、その後待ち受けるのが、伝播、註釈、改作・翻案の積み重ねである。『神学綱要』が後世に対し、一つの範型としていかなる権威を揮ったのか、それは当協会の今後のシンポジウムにおいて、世界的な研究の潮流と競合しつつ明らかにしてゆかねばならない課題であろう。

しかし、これから私が試みることは、プロクロスの『神学綱要』そのものが、先行する権威に対し、いかなる重なりとずれを出来させたのかという、いわば前史である。その前史との比較照合によつて認識したいのは、博物館の埃まみれの棚のような無味乾燥にみえかねない『神学綱要』の叙述の背後に息づくプロクロスの哲学的衝迫に他ならない。アテナイ産の乾物を戻し、生ものとはまた違った題材ともなりうることを示せばと願う。

プロティノス『エンネアデス』のオックスフォード古典叢書三巻本の原典は、それぞれ三四〇、三〇〇、二八九頁であるから、合計九二九頁になる。これに対する最初のスコラ化は『神学綱要』ではなく、プロティノスの直弟子ポルフィリオスのいわゆる『センチンチアエ』であることは、さほど知られていない。希語原題と組み合わせる訳せば、『新プラトン主義命題集成——知性的なものへの跳躍台——』となる⁶⁾。それは、行間に余裕のある判組み(CNRS版)で三五頁、全四四命題であるから、『エンネアデス』が三〇分の一弱の提要へと圧縮されたと言つてよい。次に、プロクロスの『神学綱要』はドッズ版で九二頁、全二一命題であるから、『センチンチアエ』を頁数で三倍に敷衍し、命題数で約五倍に増やしたことになる。因みに、『神学綱要』が九世紀バグダードで『純粹善論』に翻案されると、命題数は再び三一命題へと縮減される。これが、一二世紀にトレドで羅訳されると、『(諸)原因論』(*Liber de causis*) (第五命題を二分するか否かにより、全三一ないし三二命題)として、西洋中世スコラ哲学へと甚大な影響を及ぼすことになった。

規模のこのような伸縮自在のメタモルフォーシス連鎖のなか

から以下切り取る切片は、新プラトン主義枢要の主題である自己還帰をめぐり、『エンネアデス』『センチンチアエ』『神学綱要』で受け継がれ、逸れて行つた二面である。

プロクロス

★『神学綱要』命題四四…「活動面で自己に還帰できるものはすべて、すでに実体面でも自己に還帰してしまつてゐる。」

証明——活動において自己に還帰できる一方、実体においては還帰しないということがあるなら、それは実体面より活動面で優れていることになるだろう。活動は還帰可能だが、実体は非還帰的なものだから。というのも、自己に属するものは、他のもののみに属するものより、優れているのであり、自己を保持することができるもの (*ousia*) は、他のもののみによつて保持されているものよりも完全だからである。したがつて、もしなにかが、実体に由来する活動面で自己へ還帰することができるのであれば、実体をも還帰可能なものとしてもっているのが定めであつて、その結果、自己に向かつて活動するのみならず、自己に属してもいるのであり、自己によつて統合され、完成させられていることになる。」

ここでは、自己に還帰するものは、自己に属するものであり、自己を保持し、統合し、完成するものであると言ひ換えられる。逆に、還帰しないものは、他者に属し、他者によつて保持・統合・完成される。還帰するものは還帰しないものより優れており完全である。なぜなら、自己に属しているものは、他者だけに属する

ものより優れているからである。したがって、自己還帰する活動は、自己還帰しない実体に勝ることになってしまう。ところが、活動は実体に由来する。それゆえ、活動が自己還帰するなら、実体も自己還帰するのが定めたとされる。実体の劣等性格から、活動の優等性格が出て来ることはありえないと、ここでは前提されている。派生態である活動が、基盤である実体より優れることはありえないのであろうか。他者に依存する実体から、他者に依存しない活動が生ずることはないというのが、少なくともこの命題の前提であろう。

★『神学綱要』命題八三…「自己を認識することができるものはすべて、あらゆる面で (πάντ) 自己に還帰することができる。

証明——自己を認識するからには、活動において自己に還帰することは、まず明白である。というのも、認識するものと認識されるものは一だからであり、認識するものの認識は、認識対象としての自己に向かうからである。認識するものの認識ということで、ある種の活動であるし、自己を認識することができるのであるから、自己が自己に向かうのである。

しかし他方、活動においてならば、実体においてもだ、とすでに証明されている (prop. 44)。というのは、活動することにおいて自己に還帰することができるものはすべて、実体をもまた、自己に集中し (τὸς εαυτῆς συνεισφέρειν)、「自己のうちにあるものとしてもっているからである。」

「自己に属す」(prop. 44)は、「自己のうちにある」(prop. 83)と等しく、「自己に集中する」は「自己に還帰する」と同義と解せる。自己認識というのは、活動のうえで認識するものと認識されるものが一になることであるから、自己認識という事態が成立していることが諒解されさえすれば、活動面での自己還帰は自明である。そこで、命題四四すでに、活動における自己還帰は実体における自己還帰を前提するということが証明されているならば、自己を認識するものは、あらゆる面で、すなわち活動面でも実体面でも自己還帰するというのは正しい。だが、この命題八三においても、実体面の自己還帰はまだ謎に包まれたままである。

「還帰」とは、発出を前提し、発出したものが始原に立ち戻ることであるならば、往路の運動を前提としつつ、復路の運動を指し示す概念であらう。したがって、運動しないもの、運動が属さないものには、還帰も属さないと考えるのが自然であらう。活動(エネルギー)と運動(キネーシス)はアリストテレスの定式以来、区別されるものの、完結した運動と未完の運動というように、運動の目盛の終端と中途という観点で共通線も引ける。そこで、活動が還帰運動に結びつけられて、「活動面で／活動において自己に還帰する」というのはよいとしても、「実体面で／において自己に還帰する」とは、なにを意味するのであろうか。立ち止まって考えてみると、じつは、よくわからなくなる。つまり、活動以前の実体のうちに運動は帰属しないのではないか。こう考えると、『神学綱要』命題四四の「活動面で還帰するなら、実体面でも還帰する」というテーゼは、理解不能となる。ここで、ポルフィリオスに遡ってみよう。

ポルフュリオス

★ポルフュリオス『新プラトン主義命題集成センテンチアエ——知性的なものへの跳躍台——』⁸ 八第四章…

「他のものものうちに存在 (to eivai) をもち、他のものから離れてそれ自身では実体をなさない [A] ものが、自己を認識する [B] ために、自己を件のものから引き去つてそのうちで実体をなす [A]、件のもの抜きに自己へと振り向く (ortrophetai) [B] ならば——自己を認識するのであるから……——自己を存在から切り離し、自己を破壊する。」

他方、「そのうちにある一件のものから自己を引き去つて——しかも、自己を破壊することなく、そうすることが可能であるとして——そのうちにある件のもの抜きに自己を認識できる [B] ものが、件のものうちで実体をなすことなどありえない [A]。そこから自己へと破壊なく振り向く [B] ことができ、それ抜きに自己を認識することができる [B] ようなものであるからには。」

そこで、視覚や、総じて他の感覚能力も自己感覚ではなく、自己を肉体から切り離すと、自己を把握することも自己を保持する (sozetai) こともないのであるが、他方、知性は自己を肉体から切り離すと、そのときこそ最大限に直知し、破壊なく自己へと振り向くのであれば、明らかに、感覚能力は肉体を通じて [A] 活動すること (to eivai) をえたのであるが、知性は肉体のうちにではなく、自己のうちに [A] 活動すること (to eivai) および存在 (to eivai) をえたのである。」

このポルフュリオスの『センテンチアエ』でもプロクロスの場合と同様、活動と存在すなわち実体が並置されている。[B] は感覚と知性それぞれの自己還帰の想定であり、[A] はそれぞれの活動に対応した実体的基礎を推論している。肉体を経由せねば活動しえず、肉体から離存不可能であるゆえ、他のものうちでしか実体をなさない感覚に対し、肉体を必要とせず離存可能な知性は、肉体において実体をなすことはありえない。知性は自己だけで実体をなすのである。したがって、感覚の自己への振り向きは、直ちに自己破壊に行き着くが、知性の自己への振り向きは、自らの実体的の堅持、いやそれどころか自己の可能性の拡大となる。活動還帰は非依存的実体を前提とするから、依存的実体は活動還帰の基盤として不充分であることが述べられている。すると、「実体面での自己還帰」というプロクロスの言い回しは、実体が還帰の運動をすることを目指すのではなく、ポルフュリオス第四一命題の伝統を継いだ、実体の独立性の別表現にすぎないことが予想されるのではないか。

プロティノス

★プロティノス『エンネアデス』V. 3 [49] (「認識する諸存立と彼方のものについて」第二章一—二五)：

「さきに魂について、魂に自己認識を認めるべきか、また、魂のうちで認識するものは何であるのか、それはどのようなにしてなのか考察しなければならない。さて、魂の感覚する部分は、外部のもののみを対象とするとわれわれは直ちに言うことができるだろう。というのも、肉体内部に起こることの意識の場合ですら、その把握は自己の外部のものを対象として

いるからである。なぜなら、肉体のうちの情態を自己の下で感覚するからである。

他方、魂のうちの**思考的部分**は、感覚を起源としてそなわる表象像にもとづき、それらを結合したり分解したりしながら判断をくだす。あるいはまた、知性から到来するものの場合にも、「思考的部分は」いわば型のようなものを注視し、これらの型にかんしても、同じ力を行使する。そして、「思考的部分は」以前からある自己のうちの型に、来たばかりの新しい型を当てはめて、いわば重ね認識をすることにより、理解を深めてゆく。これこそまさに、われわれが魂の想起とも言えるものである。

して、**魂の知性**は力のうえで、ここまでで立ち止まるのか、はたまた、自己へと振り返って、(οτρεπειν)、自己認識するのであるか。それとも、これは**知性**に帰すべきであろうか。というのも、この部分「思考的部分」に自己認識を認めるのであれば——じつさい、われわれは知性と呼ぶのだろうか——いかなる点で、上方の知性と異なるのかもわれわれは探求せねばならないだろう。他方、「思考的部分に自己認識を」認めないのであれば、われわれは議論のうえで、かの知性まで歩を進めて、「自己が自己を」(αὐτὸ εἶαυτο)とはそもそも何であるのか考察することになる。だが、もしわれわれがこの地においても、下方の知性に「自己認識を」認めるならば、自己直知との差異は何であるのか考察することになるだろう。というのも、もしいかなる差異もないのであれば、すでにして、この思考的部分が生粋の知性(νοῦς ὁ ἀκράτος)

であることになってしまっている。それでは、魂のこの知的部分(διανοητικόν)は、それ自身もまた自己へと還歸する(ἐπιστρέφει)のだろうか。いや、そうではない。むしろ、両側でそれが受け取る型を理解するだけである。」

プロティノスはこの五四篇中四九番目の後期論攷で、どの心的レベルに自己認識を認めるべきかという問いを立て、いわば下から感覚、思考、知性の順に吟味にかけている。外感にせよ内感にせよ、自己の外部のものの把握にとどまる感覚には、明らかに自己認識は容認されない。ポルフュリオス、プロクロスでは省略される中間の思考的部分の考察が、かなりの紙幅を占めているのが印象的である。しかし、思考的部分はそれ自身「知性」と呼ばれることもあるように、知性との境界線を引くのは、捌き手の力量が要求される難作業であることも事実である。だから、後世の摘要で省かれるのは理にかなっている。つまり、感覚と知性だけを取り上げて、前者は自己認識しないが、後者は自己認識すると対比するのが、明快なスコラ化である。感覚は還歸せず、知性は還歸すると対置するのである。

ここV.3.2では、活動における還歸と実体における還歸を区別して考えるという発想が鮮明にあるとはいいたい。強いて挙げれば、「生粋の知性」という表現に、知性の独立性、すなわち還歸に必要な実体条件を読み取れるかもしれない。「魂の知性」は、思考を事とするのであれば、自己還歸すると無条件に言うことはできない。だが、生粋の知性を魂の知性と言うことはできないものの、「我々の知性」と呼ぶことはできる。「魂」よりも、自我の

変容可能性を許容する「我々」という概念の方が、プロティノスにおいては広いからである。活動のうえで還帰し自己認識するためには、「我々」は生粋の知性になるという実体条件を叶える必要がある。つまり、活動還帰の前提として、実体還帰というよりも実体変容が要求される。

★『エンネアデス』V.3[49].4.4-13:

「われわれが自己を認識するのは、このような観もの（法文のようにわれわれのうちに書き込まれた型）によって他のものどもを学ぶことによってであるか、あるいはまた、そのような観ものを認識する力を、まさに当のその力によって学ぶことによってであるのか、あるいはまた、われわれがかのものになることによってなのである。したがって、自己認識する者には二通りある。一つは、魂の思考の本性を認識する者であり、もう一つはこれより上位にあつて、かの知性になり、知性の境位で自己を認識する者である。かの知性によって自己を直知するのではあるが、逆にみれば、もはや人間としての自己ではなく、すっかり別のものになってしまったものとして（の自己を直知するの）である。（だから、思考の「自己直知」とはいえない！）それは、魂のよりよい部分だけを引きずって、自己を上方に奪い去ることによってなのである。」

この箇所ではプロティノスは、魂の自己直知がもはや自己直知とは言えなくなる逆説的な事態の出来を暗示する。魂が上方の知性に変容してしまえば、魂の自己認識ではなく、上方の知性による

上方の知性自身への自己認識になってしまう。これは、魂から知性への実体の変容以外の何であろうか。

形式上、自己認識の三段階の深化が描かれている。第一段階は、上方由来の型を他の型に適合させる判断認識を思考が自覚する、水平還帰とでも言うべきもの、第二は、上方の型を受け取る思考の一機能を思考が対自化する場面であり、上方への志向性を帯び、同一平面上では完結しない、いわば傾斜的還帰である。思考は自己のうちに気づいた上方への風穴から這い上がるよう誘われているとも言えよう。しかし第三段階で、ようやくポルフェリオス、プロクロスの問題にする還帰に至る。この局面は、思考が思考であることを脱して知性に変貌することにより、知性が自己認識する波に思考が呑み込まれる事態を指している。思考が還帰の目標とするこの自己は当然、高次の自己であるから、ここに垂直還帰が立ち現れる。

プロクロスのいう実体における還帰とは、プロティノス的には、魂が知性という別の実体に変容する垂直還帰だと読み換えられる。プロティノスの還帰に、水平・傾斜的・垂直の異なるヴェクトルがあるのは、「自己認識」ないし「自己還帰」の「自己」が固定していないという事情に依るところ大である。上記引用からすれば、人間としての自己と、もはや人間でなくなってしまう自己がある。後者には、上方の知性としての自己が差し当たり念頭に置かれるものの、始原たる一者としての自己にまで延長可能であろう。プラトン『アルキビアデスI』の伝統は、プロティノスにおいて十全に展開されている。「自己へと還帰するものは、始原へと還帰するのである。」(VI.9「善一論」[9].2.35-36)

プロクロス再論

プロクロスに戻って、再考してみよう。

★『神学綱要』命題一五…「自己に還帰することができるとはすべて、非物体的である。

証明——いかなる物体も自己へ還帰するのが本性になっていない。というのも、何かに還帰するものは、そこへと還帰する件のもつと結びつくのであれば、明らかに、自己へと還帰しおこせる物体のどの部分も、「還帰先のもの」のどの部分とも結びつくことになる。というのは、自己への還帰を果たすということは、還帰したものと還帰先のものとの両者が一となる場合のことだったからである。だが、これは物体にも、一般的に言って可分的なもの一切にとつても不可能である。なぜなら、可分的なものは、部分が異なれば別の位置を占めるという、部分の離存性格ゆえに、全体が自己の全体に結びつくことはないからである。それゆえ、いかなる物体も、全体が全体に還帰しおこせるというしかたで自己に還帰する本性にはなっていない。したがって、何かが自己へ還帰することができるのであれば、それは非物体的であり、部分をもたない。」

命題八三によれば、自己を認識するものは、活動において自己に還帰する。その理由は、認識するものと認識されるものが一だからであった。そこでは、認識主体と認識対象が無造作に一にな

る場合が考察され、プロティノスの曲折した議論の枝葉は刈り込まれている。命題四四によれば、活動において還帰するが、実体において還帰しないことは許されなかった。もし活動は還帰するが、実体は還帰しなかったならば、活動が実体より優れていることになるが、それは、明示されていない前提から忌避される。

命題一五がその欠を補うのではない。還帰するものは非物体的であるから、もし活動は還帰するが、実体は還帰しないとなれば、活動は非物体的であるが、実体は非物体的とは断定できないことになる。非物体が物体より優れているなら、還帰する活動は、還帰しない実体よりも優れていることになってしまう。非物体が物体よりも優れていることは、プラトン主義の伝統からすれば自明の理であって、証明するにも及ばないのかもしれない。

命題一五で興味深いのは、還帰するものは、その部分の一片残らず、還帰先のものすべての部分と接合しなければならないとされている点である。一つ一つの主体がすべての客体と一致するさまは、プロティノスの知性界の構造の特徴である一中全、一即一切、重々無尽を彷彿させる。とはいえ、プロクロスにおいては非物体的なものであれば、知性以外の魂にも妥当する構造だとされている点が注目される。非物体的なもの一般の特徴が、一即一切的融合となる。

さて、プロクロスの実体還帰は、プロティノスの実体変容ではなく、ポルフィリオスのいう実体の非依存的・独立性格の表現として理解すべきではないかと目星がついたところで、『神学綱要』に再度戻ることしよう。

★『神学綱要』命題四三：「自己に還歸することが出来るものはすべて、自己存立者(αὐτομόλον)である。」

証明——本性にしたがって自己に還歸し、自己への還歸において完全になるのであれば、それは実体をも自己自身からもっている。というのも、本性に則った還歸がそこへと向かうものは、個々のものにとって実体面での発出の起源でもあるからである。それゆえ、それが自己にとって善く在ることを供するのであれば、たしかに自己にとって存在をも供するであろうし、自己の存立に責任をもつ主であろう。したがって、自己へ還歸しうるものは、自己存立者である。」

「還歸」の語に纏綿する移動の含意から脱しないかぎり、プロクロスの実体還歸の意を汲むことはむずかしい。実体を基盤にする活動は運動の一種だとしても、実体そのものは運動しないはずである。さもなくば、実体転化し、或る実体は別の実体に変容してしまうはずだからである。そこで、プロクロスは「自己存立者」という着想を採用する。⁽¹⁰⁾自己存立者であるかぎり、自己が自己を存立させたのであるから、自己の実体は他者に依存せず自己完結し、独立性を備えているはずである。これは先に考察した命題四四、八三の自己還歸する実体の要件と符合する。すると、自己還歸する活動は、自己存立者であることを前提にすると言い換えられるだろう。自己存立者であれば、発出元の自己と発出先の自己は同一である。発出は自己にのみ依存する。発出を通じて自己に存在を付与し顕現する。発出先に目を向けると自己存立者の様相を呈するものは、しかし、還歸先に目を向けると自己還歸者

の様相を呈する。還歸前の自己と還歸先の自己は同一だからである。還歸も自己にのみ依存する。自己は自己によって完成される。もつとも、自己存立者にせよ自己還歸者にせよ、普通の意味での運動が属するわけではない。顕現と復歸の同時併存がその運動に他ならない。知性的・魂的存立階層の自己から自己への活動還歸に対し、自己から自己へと発出するとも、自己から自己へと還歸するとも言える実体上の自己存立者を前提させることこそ、下位の存立階層の影響下に入らない自己完結的円環を結びあげるために必要なことであつたと考えられる。⁽¹¹⁾プロクロスにとっては、実体の上で自己還歸してしまっている自己存立者には、つねに活動還歸している知性と、ときに活動還歸する魂とがある。⁽¹²⁾そして、『神学綱要』最終命題が如実に宣告するように、魂が知性になることはなく、両者の間には厳格な境界線が引かれている。しかるに、プロティノスにおいては、魂の活動還歸が実体変容を要請し、魂が知性へと越境するさまが描かれているのである。還歸の概念をめぐるプロティノスとプロクロスのずれには、思考的部分の考察を省略し、感覚と知性との対比に局限したポルフィリオスによる単純化の影が射しているのではないか。

【註】

(1) 本稿は、大阪府立大学における第一六回新プラトン主義協会大会(二〇〇九年九月五日)企画シンポジウム「プロクロス『神学綱要』とその影響史——中世まで——」の枠で報告した「範型としてのプロクロス『神学綱要』」の加筆修正版である。

(2) 生没年は紀元四一一年から四八五年四月一七日。二五歳から七五歳まで五〇年間アカデメイアの学頭を務める。一日に七〇〇行の著述をしたと言われ、『神学綱要』以外の著作としては『自然学綱要』、『プラトン神学』、『パルメニデス註解』、『ティマイオス註解』、『国家註解』、『クラテュロス註解』、『アルキビアデスI註解』、『ユークリッド原論第一巻註解』、『悪の存立論』、『摂理・運命・自由意志』、『摂理をめぐる一〇のアポリア』(『いわゆる tria opuscula』)、『賛歌』などがある。

(3) ポルフュリオス『プロティノス伝』に関し、校訂版・翻訳・註釈・研究論文を含む二冊の名著を、ポルフュリオス『センテンチアエ』研究でも同様の二冊の浩瀚な書を公にし、世界の新プラトン主義研究をリードしてきたCNR S(フランス国立科学研究院)古代末期・中世初期学説史研究班の新しい共同研究ターゲットにも内定した『神学綱要』は今後、世界的にも目を離せない文献となろう。底本としては、Proclus, *The Elements of Theology*, A Revised Text with Translation, Introduction and Commentary by E. R. Dodds, Oxford, 1963 が揺るぎない位置を占める。欧語翻訳には、Proclus, *The Elements of Theology*, translation by Thomas Taylor, London, 1816; Proclus, *Éléments de théologie*, traduction, introduction et notes par J. Trouillard, 1965; Proclus (The Neo-Platonist) *The Elements of Theology*, translation by A. C. Ionides, Edmonds, 1993; Proklos, *Grundkurs über Einheit. Grundzüge der neuplatonischen Welt*, Text, Übersetzung, Einleitung und Kommentar von E. Sonderegger, Sankt Augustin, 2004, 和訳

としては『プロクロス 形而上學』(五十嵐達六郎譯)、生活社、一九四四年及び、『神学綱要』(田之頭安彦訳)、『プロティノス ポルピュリオス プロクロス』(世界の名著一五)、中央公論社所収、一九八〇年がある。趣向がかわったところでは、近年独訳されたイオアナ・ペトリツィによる(Ioane Petrizi, *Kommentar zur Elementatio theologica des Proklos*, Übersetzung aus dem Altgeorgischen, Anmerkungen, Indices und Einleitung, hrsg. von Iela ALEXIDZE & Lutz BERGMANN, coll. Bochumer Studien zur Philosophie 47, Amsterdam & Philadelphia, 2009)一二世紀グルジア語の註解が影響史のうえで注目に値する。一三世紀には、ペトリツィのグルジア語訳が註解抜きでアルメニア語に訳され、一八世紀にはそのアルメニア語訳がグルジア語に訳し戻されたという。その間、いかなる影響を周囲に及ぼしたかは今後の研究を待たねばならないが、一世紀のミカエル・プセッロス並びにエアンネス・イタロスによるプロクロス・ルネサンスが、ビザンツではメトネのニコラオスの批判によって沈下するものの、グルジアの地でペトリツィによって継続されたことを意味する(上掲書一―一八頁参照)。L. J. Rosán, *The Philosophy of Proclus. The Final Phase of Ancient Thought*, New York, 1949; W. Beierwaltes, *Proklos. Grundzüge seiner Metaphysik*, Frankfurt a. M., 1979; S. E. Gersh, *KINHIZIA AKINHTOZ. A Study of Spiritual Motion in the Philosophy of Proclus*, Leiden, 1973 のプロクロス三大研究書に、L. Siorvanes, *Proclus. Neo-Platonic Philosophy and Science*,

Edinburgh U. P., 1996を加えたものが、基本文献であるが、いまなお最高の評価を失っていないのは、本協会名誉顧問バイヤーヴァルテス教授のプロクロス本である。同教授の最近の論文集 *Procliana. Spätantikes Denken und seine Spuren*, Frankfurt a. M., 2007も併せ参照すべきであろう。『神学綱要』の内在的構造にメスを入れた手法には共感できるが、前半の一二三命題までに局限した点が惜しまれる J. M. P. Lowry, *The Logical Principle of Proclus' ΣΤΟΙΧΕΙΩΣΤΕΣ ΘΕΟΛΟΓΙΚΗΣ ὡς Systematic Ground of the Cosmos*, Amsterdam, 1980 も一読の価値はある。

- (4) Dodds, *op. cit.*, introduction, x.
- (5) Dodds, *op. cit.*, p. 260.
- (6) ポルフィリオス『新プラトン主義命題集成センテンチアエ——知性的なものへの跳躍台——』第一―三三章邦訳（堀江聡・西村洋平共訳）、『日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』四一―号所収、二〇〇九年、一五五―一八一頁、後半部第三三―四四章の堀江・西村共訳は、『西洋古典研究会論集』第一九号、二〇一〇年、五三―七六頁参照。
- (7) この「あるゆる面で」というギリシア語の副詞は、『原因論』第一四（一五）命題では、「完全なる還帰でもって」(*reditioe completa*)のうちに、形容詞となって現れる。Cf. K. Corrigan, *L'auto-réflexivité et l'expérience humaine dans l'Ennéade V, 3 [49], et autres traités: de Plotin à Thomas d'Aquin, Etudes sur Plotin, sous la direction de Michel Fattal*, Paris, 2000, p. 158. ニニン語訳の元のアラビア語版でも *ruḥūn tammam*

と形容詞化されていることが確認できる。

- (8) 底本は Porphyre, *Sentences. Etudes d'introduction, texte grec et traduction française, commentaire*, tome I-II, éd. L. Brisson, Paris: J. Vrin, 2005.
- (9) プロクロス『神学綱要』第四四、八三、後述の四三命題とポルフィリオス『センテンチアエ』第四一命題との関連は、C. D'Ancona, *Les Sentences de Porphyre entre les Ennéades de Plotin et les Éléments de théologie de Proclus*（注八引用文献所収二七一―二七二頁）も指摘している。
- (10) J. Whittaker, *The Historical Ground of Proclus' Doctrine of the ΑΥΘΥΠΟΣΤΑΤΑ, De Jamblique à Proclus*, ed. H. Dörrie, Vandoeuvres & Genève, 1975, p. 228 によれば「自己存立者」の術語は、残存文献ではイアンブリコスに最初に現れるという。
- (11) ドッズ（前掲註釈二二四頁）は、人間の自由意志を確保するために、「自己存立者」の概念がプロクロスに必要なものであると推測している。
- (12) *In Platonis Timaeum Commentaria I*, ed. E. Diehl, Leipzig, 1903, p. 232. 12-16 では、永遠の存在としての自己存立者（われわれの存在としての自己存立者（すなわち魂）の二種が区別されている。